

項目	説明
高潮	台風などの熱帯性低気圧、温帯性低気圧により海面が異常に上昇する現象で、気圧の低いところで海面が上昇し、高いところで低下します。
津波	地震で起こる津波は、海底面の急激な変動（隆起や沈降）によって発生します。海底面が変動することで海水面が変動し大きな波を生じます。このように、地震による海底の地殻変動、沿岸部での大規模地すべり、海底火山の爆発などによって発生し、そのスピードは水深が深いほど早く、外洋では新幹線よりも速く伝播します。ちなみに、古文書等では、津波、津浪、海嘯、洪波、高波、高浪、高潮、高汐、高鹽、高塩、海溢、激浪、大浪等で表現されていましたり、波の状況を描写した記載などにより津波を表現されています。
地震の際の複合災害	古文書等によると、地震のみならず、それに前後する災害により、被害が拡大したり、復旧・復興が長期化したりしたことが記載されています。代表的なものでは、例えば、暴風雨、集中豪雨、大風（烈風）、洪水、高汐などの気象災害、富士山噴火、降砂、降石礫などの噴火に伴う災害、冷害、飢饉などの災害、虎列拉・虎列利（コレラ）、疫病などの伝染病などが、地震に前後して発生しています。
史料に見られる液状化を思わせる記載例	古文書等の史料には、地震の際の液状化を思わせる記載があります。以下、その例です。「土中に埋もる」、「砂を吹く」、「泥吹出し」、「柱沈む」、「大松地の下へいりこみ」、「百姓は深田に埋まる」、「橋杭付の台石滅り込」、「橋崩込」、「仮橋ハ川中へ引込ム」、「土地沈下」、「窪み」、「田畠陥没」、「ゆりコミ（地震陥没）」、「大地落込」、「川原は砂処々山もりニ高く成」など。
史料に見られる地震の際の地変の例	古文書等の史料には、地震の際の地変や通常とは違った現象の記載があります。以下、その例です。「地湧没」、「山崩、山落」、「平田湧出シテ山トナリ」、「土地陥落」、「地破、地割」、「堤防崩壊」、「土地隆起」、「湊遠浅に替り」、「井戸濁り」、「堤防寸断」、「井堰落」、「堤ハ中腹よりわれて薄濁の水わき流るゝ」、「橋崩込」、「島海中へ沈ミ」、「山抜ケ」、「山裂」、「大石山ぢ（より）崩落」、「土地裂」、「山津波、土砂崩」、「井戸水干」、「池決潰」、「河流変遷」、「瀬變る」など
都市の水害	降雨が地面に浸透できず、下水道に集中し河川に排水できなくなり氾濫する内水氾濫、河川の堤防が決壊して市街地に河川水が流入する外水氾濫があります。
水害に対する地下の安全性	地下街は降雨を避けられ、一見、便利な施設ですが、ひとたび氾濫水が流入すると避難が非常に困難となり危険な場合があります。
火山噴火	地下深いところから上がってくるマグマやその熱によって起こります。目に見えない地下の異変は、さまざまな観測で捉えられるようになってきています。マグマが地表近くまで上がってきていることを掴んでも噴火が起こらなかった例もあります。
津波防災の日、	「津波防災の日」（毎年11月5日）は、東日本大震災による甚大な津波被害を踏まえて、2011年6月に制定された「津波対策の推進に関する法律」において定められました。広く津波対策についての理解と関心を深めることを目的としています。この日は、津波被害の大きかった安政元年（1854年）11月5日の安政東海・南海地震に由来しています。
世界津波の日	「世界津波の日」（11月5日）は、津波の脅威について関心が高まり、その対策が進むことを期待して制定されたものです。この日は、第70回国連総会本会議の決議、第3回国連防災世界会議及び持続可能な開発のための2030アジェンダのフォローアップとして、多数の国々が提案したものです。なお、決議の具体的な内容には、（1）11月5日を「世界津波の日」として制定すること、（2）早期警報、伝統的知識の活用、「より良い復興」を通じた災害への備えと迅速な情報共有の重要性を認識すること、（3）すべての加盟国、組織、個人に対して、津波に関する意識を向上するために、適切な方法で、世界津波の日を遵守することを要請すること、等が含まれています。

項目	説明
稻村の火	稻むらの火は、1854年（嘉永7年/安政元年）の安政地震津波に際しての出来事をもとにした物語です。その内容は、「村の高台に住む庄屋の五兵衛さんが、地震の揺れを感じたあと津波の来襲に気づき、大事な稻の束に火をつけて村人に危険を知らせ村人を守った」といった内容です。早期避難の重要性や人命救助のための犠牲的精神の發揮が説かれています。この話は、小泉八雲の英語の作品をもとに、中井常蔵が翻訳・再構成したものとされています。
細江神社	かつて浜名湖入口（今切口）にあった角避比古神社は、1498年の明応地震津波により被災しました。ご神体も流されましたが、奥浜名湖の気賀に漂着しました。これを尊び社殿を建て、ご神体を安置したのが細江神社の始まりとされています。浜松市北区にある神社で、「地震の神様」と言われています。
長周期地震動	規模の大きい地震が発生した場合に、ゆっくりとした大きな揺れ（地震動）が生じます。このような地震動を長周期地震動です。建物には固有の揺れやすい周期（固有周期）があり、地震波の周期と建物の固有周期が一致すると共振して、建物が大きく揺れます。高層ビルは低い建物に比べると、長周期の波と「共振」しやすく、共振すると高層ビルは長時間にわたり大きく揺れます。また、高層階の方がより大きく揺れる傾向があります。大規模な平野や盆地は、柔らかい堆積層で覆われており、堆積層で長周期の波が増幅されます。高層ビル高層階でのこのような状況は、震度では把握できないことから、気象庁では新たに長周期地震動階級を策定し、試行的に長周期地震動に関する観測情報の発表を行っています。長周期地震動については、気象庁のホームページでも詳しく解説されています。
長周期地震動階級	高層ビルを対象として、長周期地震動階級が推計された際に発生する可能性がある被害を記述したものです。対象となる建物や構造物の状態、継続時間などの地震動の性質により被害は異なりますが、長周期地震動階級1の揺れの状況は、高層ビル内において、室内にいたほとんどの人が揺れを感じ驚く人もいる、ブラインドなどの吊り下げものが大きく揺れるような状況とされています。階級2の状況は、室内で大きな揺れを感じ者につかりたい感じる、物につかりないと歩くことが難しく行動に支障を感じる、キャスター付き什器がわずかに動き、棚にある食器類、書棚の本が落ちることがあるような状況です。階級3の状況は、立っていることが困難になり、キャスター付き什器が大きく動く、固定していない家具が移動することがあり、不安定なものは倒れることがあるような状況です。階級4の状況は、立っていることができず、這わないと動くことができない、揺れに翻弄される、キャスター付き什器が大きく動き転倒する物がある、固定していない家具の大半が移動し倒れるものもあるような状況です。
活火山	昔は、今現在活動している、噴火している火山は「活火山」、現在噴火していない火山は「休火山」あるいは「死火山」と呼ばれていました。しかし、数千年にわたって活動を休止した後に活動を再開した事例もあり、近年の火山学の発展に伴い過去1万年間の噴火履歴で活火山を定義するのが適当であるとの認識が国際的にも一般的になりつつあることから、火山噴火予知連絡会は「概ね過去1万年以内に噴火した火山及び現在活発な噴気活動のある火山」を活火山と定義し直しました。この結果、活火山の数は現在110になっています。
常時観測火山	我が国にある110の活火山のうち、「火山防災のために監視・観測体制の充実等が必要な火山」として火山噴火予知連絡会によって選定された50火山については、噴火の前兆を捉えて噴火警報等を適確に発表するために、地震計、傾斜計、空振計、GNSS観測装置、監視カメラ等の火山観測施設を整備し、関係機関（大学等研究機関や自治体・防災機関等）からのデータ提供も受け、火山活動を24時間体制で常時観測・監視しています（常時観測火山）。
災害廃棄物	地震や風水害等の自然災害により発生する災害廃棄物のことです。環境省・各自治体では、災害廃棄物の適正かつ円滑・迅速な処理のための対策（対策指針等）・計画についてとりまとめており、連携を高め、災害対応強化を推進しています。中部地域においても、南海トラフで発生する巨大地震に備えて、広域連携も視野に置いた準備が進められています。

項目	説明
特別警報	気象庁は、大雨、地震、津波、高潮などにより重大な災害の起こるおそれがある時に、警報を発表して警戒を呼びかけますが、警報の発表基準をはるかに超える大雨や大津波等が予想され、重大な災害の起こるおそれが著しく高まっている場合に、「特別警報」を発表し最大級の警戒を呼びかけます。
特別警報の発表基準	<p>発表基準は以下の通り。</p> <p>大雨：台風や集中豪雨により、数十年に一度の降雨量となる大雨が予想される場合 数十年に一度の強度の台風や同程度の温帯低気圧により、大雨が予想される場合</p> <p>暴風：数十年に一度の強度の台風や同程度の温帯低気圧により、暴風が吹くと予想される場合</p> <p>高潮：数十年に一度の強度の台風や同程度の温帯低気圧により、高潮になると予想される場合</p> <p>波浪：数十年に一度の強度の台風や同程度の温帯低気圧により、高波になると予想される場合</p> <p>暴風雪：数十年に一度の強度の台風や同程度の温帯低気圧により、雪を伴う暴風になると予想される場合</p> <p>大雪：数十年に一度の降雪量となる大雪が予想される場合</p>